

沖縄の民間巫者“ユタ”のカウンセリング機能の一 研究：宗教的面接場面の分析から

吉良, 安之

<https://doi.org/10.15017/628>

出版情報：健康科学. 17, pp.51-58, 1995-02-25. 九州大学健康科学センター
バージョン：
権利関係：

沖縄の民間巫者“ユタ”のカウンセリング機能の一研究 ——宗教的面接場面の分析から——

吉 良 安 之

A Study on the Counseling Function of Okinawan Shaman “Yuta”
— From an Analysis of Interviews Conducted in a Religious Situation —

Yasuyuki KIRA

Summary

The aim of this article is to investigate the counseling function of Okinawan shaman “Yuta”. Two interviews conducted by shamans are here in reported and are discussed from the viewpoint of comparisons with counseling interviews based on clinical psychology.

Some of the findings were as follows; ① The style of developing a rapport is unique, i. e. rapport is nurtured by guessing the facts related to the client by supernatural ways. ② The interview is strongly led by the shaman. ③ The meaning of the client's distress is interpreted by relating it to the context of the lack of taking care of spirits of the client's ancestors. Finally, ④ the shaman concretely advises the client on how to overcome the distress based on the above mentioned context.

Key words : Counseling function, Okinawan shaman “Yuta”, Interview in religious situation.

(Journal of Health Science, Kyushu University, 17,51-58,1995)

はじめに

1. 本研究の目的

カウンセリングは、もともと西欧で発達した臨床心理学の学問体系にもとづいて、心理的に困難な状態にある人に対して行われる人間関係を通じての心理的援助の行為であると言えるであろう。しかしそれに類するような心理的援助の行為は、その起源を明らかにすることが困難なほど古くから、人間社会に遍在する営みとして行われてきたに違いない。カウンセリングを職業とする者にとって、土着の文化の中で行われてきたそのような営みを知ることは、自らの行っているカウンセリングというものを改めて振り返るうえで、非

常に貴重なモーメントになるであろうと考えられる。

筆者は今回、沖縄地域の民間巫者（一般には“ユタ”と呼ばれている人たち。この名称は沖縄社会では時に批判的な意味で用いられるが、ここでは固有の宗教的世界観を持ち、固有の宗教的行為を行う民間巫者の意味で、この名称を用いる。）について調査を行う機会に恵まれ、複数のユタに直接対面して宗教的面接（「ハンジを買う」と呼ばれる、ユタの判断や解釈を求める行為）を受けることができた。本研究ではそれを資料にして、そこではどのような面接がなされているのか、それは臨床心理学の観点から見てどのような特徴を持つものであるのか、ということについて検討していきたい。

2. 「カウンセリング機能」とは

本研究では、民間巫者の行う宗教的面接を、臨床心理学的なカウンセリングとの比較の観点から検討しようとする。つまり何らかの意味で、民間巫者の行う行為にはカウンセリングとの共通点があるだろう、という前提に立っている。そのような共通点をここでは「カウンセリング機能」と呼んでおくことにしたい。このような視点を持った研究者としては以下の人々をあげることができる。大橋³⁾は「筆者は、ユタが伝統文化に密着した一種のカウンセラーとしての役割を担い、不安や葛藤をもって訪れてくるクライアントに対して、その問題場面や不安・葛藤に超自然的信念体系にもとづいて意味づけを与え、クライアントの認知・態度・行動を方向づけている事実に着眼し、多角的にフィールドワークを行ってきた」と述べている。饒平名⁴⁾は「社会的な側面からムヌヌ（沖縄県宮古島地方での民間巫者の呼称。「物知り」の意）をみると個人、集団と霊的世界の互惠の秩序調和の媒介者であるとともに祭祀儀礼の執行者ともなり、依頼者のカウンセラーでもある」と言う。また池上⁵⁾は「カウンセラー」という表現はしていないものの、ユタ信仰における救済機構について「個人の不幸の究極的原因を、『共苦共感の世界』を構築することによって解決に導こうとする、基本的な図式をよみとることができる」と述べている。

ではカウンセリング機能とはどのようなものであろうか。それは今後研究を深めるにつれて、より明確にしていくべきものであるが、ここでは研究の出発点として、仮に以下のように考えておきたい。

筆者は、「カウンセリング」という用語は臨床心理学の学問体系に基づいて専門の訓練を受けた者によって行われる行為のみを指すものと考えている。それに対して、「カウンセリング機能」とは、行為の当事者が誰であれ、ある種の心理的困難や悩みを感じている個人に対して、人間関係を通じて何らかの心理的影響を及ぼすことにより、心理的困難や悩みを軽減ないしは変化させるような機能であると考えたい。ここで言う心理的困難や悩みには多様なものが考えられる。自分の性格や生き方や人間関係のあり方について悩む、というような、もともとが心理的な意味での悩みも考えられるが、民間巫者のカウンセリング機能を考えるうえでは、二次的な意味でのそれも視野に入れておく必要があると考えられる。例えば、自分や家族が病気がちである、事業がうまくいかない、結婚したいができない、経済的にうまくいかない、などの出来事を契機に二次的な意味で心理的な困難・悩みを感じ、民間巫者

を訪れる人も多いようである。

このように広い意味でカウンセリング機能を考えるならば、それはさまざまな立場の人によって担われていると言えるだろう。例えば医者や看護婦は、体の病気を治す行為を行っているが、それと同時に、病気について説明したり、患者の不安を人間関係を通じて受けとめたりすることによって、二次的には患者の心理的困難をも軽減させている。極端な場合には、病気そのものは治らなくてもカウンセリング機能は果たしていることもありうる。司法関係者も法の領域での援助を行うことを通じて同様の機能を果たしている面があると考えられる。そして宗教者は宗教的な行為を通じて信者に心理的救済を与えるならば、信者に対してこの機能を果たしている。民間巫者の行う行為について考えてみると、「祖先の祭りがこれでよいのかどうか知りたい」というようなニードに応える場合にはカウンセリング機能の意味は少ないが、クライアントが心理的に困難や悩みを抱えており、それに応える心理的作業がなされる場合にはカウンセリング機能を果たしていると言えるであろう。本研究ではさしあたって、このように広い意味でカウンセリング機能を考えておきたい。

ユタの行うハンジ面接の実例

ここに示す2つの実例は、1994年の9月に沖縄での調査を行ったさいに、筆者自身がクライアントとなって面接を受けたものである。調査には筆者以外に2名の男性調査者が同行し、面接場面にも同席した（事例Aについては、そのユタを紹介してくれた地元の主婦も同席している）。

筆者自身が受けた面接を研究の資料にすることには、利点と難点の両面が考えられる。利点としては、筆者が実際に面接を体験してみても実感を含めて考察が可能であることがあげられる。宗教的面接がクライアントにどのような心理的影響を与えるものであるかを検討するうえで、これは大きな利点であると考えられる。難点としてあげられるのは、①筆者が本当に心理的な困難や悩みを感じてユタを訪れたというよりも「まず体験してみよう」という心理的構えであったこと、②筆者が地元沖縄の出身ではなく、文化を異にしているということである。①はクライアントとしての体験に影響していると考えられるし、②は面接のプロセスに大きな影響を与えていると考えられる。事実、実例に示すように、ユタは「ヤマトのことはわからんさあ」と言いながら面接を行っている。以上の2点から、

ここにあげる実際例はオーソドックスなハンジ面接と言えるかどうかには疑問が残ると言えよう。資料としてのそのような限界を認識したうえで、検討を行うことにしたい。

(以下の面接記録で〈 〉はユタの発言、「 」はクライアント(筆者)の発言、「 」はそれ以外の人の発言、[]は筆者による注釈を示している。)

1. 事例A(60歳女性)

《ヤマトのこと、わからんさあ》《仕事の関係ですか?》
「仕事のこととか、家族のこととか」《運勢ね》「はい。運勢をみてもらいたいと思って」

[神棚のロウソクに灯をつけて、拝みながら]《南洋に行くの? 誰が南洋に行くの?》「ナンヨウ?」[同伴した地元の主婦が]「私のお父さんが行く」《あなたの旦那さんが南洋に行くって?》「はい」《ああ、そう》「おばあちゃんも」《行くときはよく注意なさいね。神様が「注意なさいね」って》

[神棚を拝み、拍手をうつ]《福岡? 福岡?》「福岡から来ました」《福岡ですか》「はい」[神様と対話している様子]《最初から福岡じゃないでしょ、ね》「…はい。はい」[クライアントの姓名、住所を聞き、メモ用紙に書く]

《お父さんの何男?》「長男です」《お父さんは?》「長男」《長男の長男ね》「はい」《で、もともとは福岡じゃない?》「はい。あの、〇〇県です」《〇〇県の、どこですか?》「△△という所です」《この、〇〇県の△△の、もっと、もっと、あの、あなたの別の部落、別のあれがみえますね。△△の先にも見える》《古い井戸が見えますけどさ。段々になってる。きれいな段々じゃなくて、少し山みたいで》《お稲荷さんですか? 金毘羅さんですか? ご先祖さんが祭っていたはず》

《あなたは、何どしですか?》「ヒツジどしです」[以下、クライアント本人、およびその父親と母親、妻、子供2人、祖母(つまり血縁家族全員)の年齢、干支を聞き、メモ用紙に書く。祖母、母親、妻については、出生地やその旧姓、および続柄(何女か)も聞く]《あなた、きょうだいは?》「妹がいます。結婚している」《じゃあ、いい》[と、これについてはそれ以上何も聞かない]《この福岡の住所に、みんないるの?》「いいえ。〇〇県に両親と祖母がいます」《△△にね》「そうです」《福岡には?》「僕と家内と、子供2人」(中略)

《いろいろとね、障害物とかね、病難。重い病気とかじゃなくて、少しずつの障害物とか、前ふさがり。前がふさがってさ、自分の思うように行動できないと

いうのがありますが、どうですか? 思うままにこれやろうと思っても、前ふさがり。スムーズに行動できないというのがありますが、どうですか? 家族が病気をしたり」「僕のことも含めて?」《みんな含めて。仕事のこととか》「うん…。仕事で、実際の妨害があるわけじゃないけど、先が見えない、今からどういう仕事をして行くかとか、見えてこない…。それと、家内が、今はそうでもないけど、前に病気をして手術をしたりとかある」《そうですね》[しばらく沈黙]《大杉って聞こえますけど、それは何ですか?》「大杉? 大杉ですか?」《はい。それと天神さんと聞こえますけど、おばあちゃんたち、大きいおじいさんとか、3代か4代前かの人、ご信心されて、字を書かれて、それを捨てたんですか?》「僕はそのへん、全然わからん」[ユタはがっかりしたように笑う]《じゃあ、おばあさんとか、お父さんに聞かれて》「大杉…」[クライアントが考えながらつぶやくと、突然ユタは大きな声になって]《杉の木がいっぱい生えてるところの近い屋敷! あったでしょ!杉の木がいっぱい生えた、イナカ、イナカ!》「田舎…」《はい。水が少し、小さくなくて、小さな水が流れてるところですけど…。水の流れる音が聞こえる!》「あのね、僕は行ったことがないんですよ」《はい、はい。ごめんなさいね》「いえ。でね、僕の祖父、死んだんだけど、祖父とばあちゃんが結婚した後で、その田舎から出てきたんですよ。△△の方にね」《はい。捨てられた無縁、捨てられた無縁のお墓から持って来てなくて。いや、確かに持ってらっしゃった筈だけど、土地の神様にお礼とかされてなくて、それから前ふさがりされてるということです。沖縄ではヌジファ [抜霊の意] と言うけど、これはヌジファされてなくて、そのまま持って来てる。ただ供養してさ。土地の神様から何もヌジファされていない。だからあなたは、土地を買おうか、売買しようか、事業もしようか、と言ってるけど、いろいろと目にも見えない祖先の先の不足で、前ふさがりされるよって》《あなたはヒツジだから、神様は大日如来。大日如来は祖先からの間違いを正すチヂ。その役を持つてる神様。だけど知らないから、それでふさがれるよって》《位牌があるでしょ。ミーグソ [死後間もない霊]の位牌から、そのままになってる。四十九日が終わったら、その位牌は燃やして、姓名を祖先の位牌に載せるさね。それがされてないよ、ということ》「あのね、僕の父が、△△に墓を建てたんですよ。田舎の方の遺骨は持って来たんですよ。持って来ただけで」《はい。だからヌジファが抜かれてないよって。だから、奥さんはウシだから

ら、病氣もさせられるよ、あんたが前ふさがりされるよ。お父さんもウシどしね。仕事うまくやってきたつもりだけど、目にも見えないものが。よその土地にただで貸しませんよ。元あったお墓の土地からちゃんと、小作料、上納を土地の神様に納めて、ヌジファを解いてくるわけよ。お宅のお墓はこちらですよ、と。これがまだですね]

《それと、小さな子供さんのお遺骨がないわけ。持って来てないわけ。むこうで捨てたわけ。怒ってるけどさ。私が「悪うございました、怒らないで下さい」って、神様に言ってますけど。カネツボに入っていたけど、お坊さんが、もう三十三年忌も終わっているから、もういいですよ、ということで、持って来てない》
《お墓、ひとつじゃないよね。今はひとつになってますけど》「はい。一緒にして持ってきたけど、前は土葬だから」

《おばあちゃんは元気ですか？ 持病再発って出ますけど》「ばあちゃんは、もう齢でね、いろいろ持病はあってね》《お父さんは二兎を追う者は一兎もつかまえず。損しますね》「父親？」《はい。お母さんは障害物が次々と出る困難。今年ね。気をつけましょう》《お宅は、今年何か盗まれて、盗難届けを出す。病難が続く。勇気出しましょう。希望持ちましょう。子供さんは、食べなくなったりする。胃の悪い》

《苦勞があっても努力すれば、希望が叶うことになりまして。ただし、守護神と火の神様をたててもらいたい。そうすると発展します》[台所の火の神様を祭るように。守護神はヒツジだから大日如来、妻と子供はウシだから虚空蔵菩薩だと言う]《それと、ご先祖様のお墓と位牌。さっき言ったこと。地元の神様にちゃんとお礼を申し上げて、上納も納めて、ヌジファを抜いて、結びして、持ってくるわけ。それがされてません。祖先の位牌はひとつにまとめるのがホントですけど、ひとつに入らなくて、並べられてる。四十九日が終わったら、祖先代々の位牌に結ぶはずなのに、ひとつにされてないわけ》

《そして、このウシの男とサルの子 [クライアントの2人の息子] のこと、生まれましたと、おじいちゃんに報告した？ してないよね》「死んだじいちゃんに？」
《はい。お墓に行きました？》「墓には連れて行っただけど》《どここの長女と結婚して、子供2人生まれましたよって、報告しましたか？》「してない(笑)」《まだ、神様の籍に載ってない。載せて下さい。そうしないと、目にくるからね。気をつけましょう。油断すると、保証人になって、お金を損するか、または病難。災いが

来るからね》(後略)

2. 事例B (62歳女性)

[神棚に灯明をつけて]《住所、氏名を書いて下さいね》《お宅の住所、これ親元じゃないでしょ》「はい」
《お宅、寮にいるの？ 寮生活みたいなの？》「いえ」
《それともアパート借りてるの？ 間借りしてる所》
「あの、家を最近買ってですね。その家です」《じゃあ、ひとりぼっちでいる寮はどこだったの？ 会社の寮なの？》「あの、ひとりじゃなかったけど、この前まで、職場の宿舎にいました」《あー、宿舎って言うのか。今は新築して？》「中古の家だけど」

《お父さんがいるの？》「えーと、両親は〇〇県に住んどって」《そこはお父さんの生まれた所なの？》「生まれも〇〇県なんですけど、田舎の方で、今住んでる所はまた違うんです」《町の方にね》「はい」《あの、山の斜面の下の方にいたの？ お父さんの生まれた所》
「僕が行ったことがないんですけどね》《あ、ほんとにね》
「山の方って聞いているから」《山の斜面の、前の方に川が流れとるからよ。山がこうあったら、このへんに家があるみたいなのよ。で、ここが畑かなあ。道があって、畑で、川が通ってる。知らない？》「行ったことないんですよ」《お父さんが生まれた所に？》「はい」[〇〇県の親の現在の住所を書くように言う]

《お父さんは何男か知ってるの？》「長男です」《おじいちゃんは次男じゃない？》「祖父は男ひとりの長男やったと思う」《その上は？ 次男じゃない？》「その上は知らない」《(私は)次男だと思ってる》《本家本元はどこなの？ 知らない？ 住所じゃなくても》「僕はじいちゃんの代からしか知らない》《お父さんたちは知ってる？》「父親は詳しいかもしれんけど》《そうだろうね。あんた、そこまでおいでと言われてるからよ》
[クライアント本人・両親・祖母・妻・2人の子供(血縁家族全員)の年齢や干支を聞く]《それで、古い家を買ったのね。土地は？》「一緒に買った」

[神棚に向かい、小さな声でクライアントのことを神様に伝えている様子]《土地は40坪？》「60坪くらいかな》《どうしてこんな小さく見えるの？ そしたら》
「……」《じゃあこの土地はもともと2軒が集まっている？》「分かれてるということ？》《そう》「あ、ただね、前に駐車場があって、ちょっと離れて家が建ってる》
《うん。お家だけのものは40坪あまり？》「あー、そうかもしれん》《2つになって見えるからよ》《沖繩だったら、門をどこからあけて、どういようにつて拝みはするけど》[神棚に向かい小声を出しながら拝む]《誰

が交通事故で亡くなった？ 急に亡くなった人がいるの？ それとも急に倒れたの？ おばあちゃんの所よ。心配事なかった？」「あの一、ばあちゃんが1年くらい前に倒れました」「その前におじいちゃんはどうなるかということ。いるの？」「亡くなりました」「上によ、おじいちゃんとおばあちゃんが住んでいた所に、山の神様の神社があるはず。行ったことないって言ったね」「そうなんですよ」「前住んでいた所をよく知らんと、今度はね、今度買ったところ、合図が来るわけ。山の神様から合図があるから、今年とても気をつけてちょうだいね」「今年？」「はい」「そこに行ってお礼を言わないといけないわね。おばあちゃんが倒れたからいいけど、もしかの場合はあんたに事故があったわけよね」「んー」「家を買ったのは今年なの？」「はい」「去年だったらよかったけどよ。だから、現在住んでる家は、2つに折れると言うからよ。危険が来るということもあるからね。気をつければいから、だから一応報告をあげんといけん」「報告をする…」「近所にアマテラスか何か、神社はないの？ そこに行つて、神主さんをお願いして、お清めしてもらってね。おじいちゃんの住んでた所は何ていう所だったか（を聞いて、神主さんに言って）神主さんをお願いしてちょうだいね。これしないと、あんたにくるか、奥さんにくるかよ。それと長男、ムシが悪いよ、ちよつと」「本当はおじいちゃんを供養することが大きいわねえ」「あんだ、めまいとか、頭痛いとかない？」「それはないけど、血圧が少し高い」「だから私は、これからがこわいわね。[40代後半がよくないと言う]これは山の神様から請求が来てるからね」「だからいちばん大事なものは、土地があって自分は生きてるといことね。お清め、お祓いすること。ここで生活してるから守って下さいということね」（後略）

臨床心理学の観点からみた

ハンジ面接の特徴

1. クライアントに関連した事実を超自然的な方法で「当てる」ことをめぐって

事例Aの場合、ユタは神棚を拝むとすぐに、「誰が南洋に行くの？」と聞いた。ユタを訪ねる途中の車の中で、同伴した地元の主婦が「私の夫がサイパンに旅行に行くのを楽しみにしている」という話を聞いたところだったので、筆者はとても驚いた。また、続けてユタは「福岡？」と筆者に尋ねた。筆者らがヤマト（日本内地）から来ていることは伝えてあったが、どこから来たのかはユタに言っていなかった。続けてユタは

「最初から福岡じゃないでしょ」とも言った。これも事実であるので、筆者は奇妙な体験に非常に戸惑うとともに、このユタには自分のことは何でもわかってしまうようだから、隠し立てをしてもダメで、裸になってユタの言うことを聞くしかない、と覚悟を決めるような気分になった。

事例Bの場合も、面接開始直後に、筆者の書いた住所を見ながら「これ親元じゃないでしょ」と言い、「お宅、寮にいるの？」「ひとりぼっちでいる寮はどこだったの？」と筆者に尋ねた。これは半分は事実合うものであった（親元は別であり、家族で住んでいたアパートから最近、一戸建に移ったところであった）。事例Aに較べると、この場合はハンジ場面に少し慣れており、また半分は事実合わないものであったので、筆者はそれほどインパクトは受けなかった。

このような、クライアントに関連した事実をユタが超自然的な方法で「当てる」ことは、ユタが宗教上の特別な能力（カミと交信することができ、クライアントにはわからないことを判断する能力）を持っていることの証であり、ユタに対するクライアントの信頼感を高めるものであろう。そしてそのような能力を持った人に全面的に依りかかろうとするような態度が生じることになる。

ユタのこのような能力は、その後も面接をリードしていく要因となる。事例Aでは「前がふさがって自分の思うように行動できないというのがありますけど、どうですか？」「大杉って聞こえる」、「お墓は持ってきたけど、土地の神様にお礼がされてない」など、事例Bでは「（土地の広さが）40坪」とか、「おじいちゃん、おばあちゃんが住んでいたところに山の神様の神社があるはず」などである。ユタに対して信頼感や依存心が高まっている場合には、クライアントはそれに応えてさまざまに連想を巡らし、それに合うような事実を捜し出し、それに特別な意味づけをしていくことになる。つまりユタとクライアントとの共同作業が行われることになる。

以上のことから、ユタの行うハンジ面接の特徴として、2つの点を指摘できるであろう。

第1は、ラポール形成の手続きが独特であることである。臨床心理学で言われるラポールとは、カウンセラーとクライアントが心理的共同作業を行っていく基盤となるような信頼関係のことであり、それはカウンセラーがクライアントの感じている感情体験を共感し受容することによって形成されていくものである。一方、ハンジ面接においては、ユタがクライアントに関

連した事実を超自然的な方法で「当てる」ことによって、瞬時のうちに独特の人間関係が成立する。それはその後のユタとクライアントの共同作業の基盤となるものである。「ラポール形成」と呼びうるであろう。しかしその人間関係の質は独特である。カウンセリングの場合のラポールとは、クライアントは自らの主体性を保ちながら共同作業のパートナーとしてカウンセラーに信頼を寄せるようなものであるが、ハンジ面接でのそれは、クライアントは自らの主体性をある程度放棄して、ユタの持つ超自然的な世界観の方に引き込まれるようなものであり、依存的なニュアンスの強いものであると考えられる。このような人間関係が成立することによって、ユタはクライアントに対する心理的影響力を獲得することになると考えられる。

第2に、面接をリードするのは一貫してユタの側であることがあげられる。臨床心理学的なカウンセリングでは、主な話者は明らかにクライアントである。クライアントは自分の主訴やそれにまつわる連想をカウンセラーに語り、カウンセラーはそれを傾聴しながら、クライアントの問題を明確化したり自分の連想を付け加えたりすることで、クライアントの体験に変化をもたらそうとする。これに対してハンジ面接の場合には、主な話者はユタである。ユタはクライアントの主訴でさえほとんど聞こうとしない。カミとの交信によって得た判断をユタの側からクライアントに一方的に提示するのであり、それに対してクライアントから異なる事実が語られようと、クライアントに心当たりがなかろうと、判断を変更することはない。クライアントに許されるのは、ユタの判断についてどう連想し、どう解釈するかということだけである。このように、面接過程は一貫してユタによってリードされて進んでいくのである。

ここに述べた2つの点は、相互に関連していると考えられる。もしもユタが独特のラポール形成に失敗するならば、ユタ主導的な面接過程はユタの独走となり、クライアントはそれについていかなくると考えられる。つまりユタの判断が何を指しているのかを懸命に連想しながら考えたり、判断に合うような事実を見つけ出したりするような努力がなされなくなり、心理的共同作業が行われなくなると考えられる。ユタ主導的な面接がクライアントにとって意味のある体験となるのは、「当てる」ことによって強烈なインパクトが与えられているからであろう。

2. 祖先の供養・土地の神の供養という文脈に乗せることをめぐって

ハンジ面接においてユタの行う作業として2つの事例に共通しているのは、クライアントの血縁家族について住所・年齢・干支などを確認していること、クライアントを取り巻く血縁家族に起こっている不幸な出来事（病気・事故・事業の不成功など）を聞き出し、それを土地と結びつけた形での祖先供養の問題と関連づけて解釈していること、そして不幸を取り除くために何をすればよいのかという対処策が祖先あるいは土地に関連した供養をすべきであるという形で示されていることである。

つまり、現在発生している不幸が、祖先あるいは祖先の住んでいた土地の神に関する供養の不足と関連づけて解釈されるわけである。このことは心理的には、クライアントの心理的困難や悩みが、祖先とその土地に関する供養という文脈へと移し替えられることを意味していると考えられる。このような文脈の変換が真実味を持ってクライアントに体験されるのは、ユタとクライアントがそのような文化を共有しているからであろう。

このことから考えられるのは、ユタによるハンジ面接はクライアントの心理的な苦悩を直接軽減させるといっても、むしろ悩みの内容を変化させる面があるのではないかと、ということである。例えばクライアントが自分自身や家族の病気に悩んでいた、仕事がいまいかないことに悩んでいた、ユタを訪れて祖先の供養が不足していると解釈されれば、クライアントの悩みはそのことに置き換えられることになる。つまりハンジ面接は、悩みの意味づけの変換をクライアントに提供する面があると考えられる。

このような悩みの意味づけの変換について、臨床心理学的なカウンセリングの場合にはどうであるかを一言で述べることは難しい。学派やカウンセラー各人によって、このことについての考えは異なる面があるであろう。しかし、クライアントが当初の訴えを離れてさまざまな話題（家族との関係や対人関係についての話題であることが多い）を感情を込めて語り始め、その感情やそれにまつわる葛藤が解消するにつれて、当初の主訴であったものも解消していく（あるいは悩みであったものが悩みと感じなくなる）ことはカウンセリングにおいて一般に生じている現象であると言えるであろう。つまり、当初の悩みとは異なる内容がカウンセリング場面での主な話題となり、それを取り扱うことがカウンセリングでの主な作業となるわけである。

そのような意味では、臨床心理学的カウンセリングでも悩みの意味づけの変換が行われると言えるであろう。しかしその場合、どのような方向に意味づけが変換されるかは、クライアントとカウンセラーとの対話の場においてクライアントに生じる連想によって主導されていく。もちろんその背景にはカウンセラーの拠って立つ理論的基盤があり、それが暗にクライアントの連想に影響を及ぼしている面もあるが、クライアント自身が自分の連想を通じて実感のある方向に進んでいくのでなければカウンセリングは深まらないことになる。したがって、意味づけの変換される方向は、クライアントによってかなり異なってくるのである。これに対して、ハンジ面接の場合には、祖先の供養・土地の神の供養という明確な脚本が存在していること、それをユタが主導的に示すことをその特徴としてあげることができると考えられる。

このような意味づけの変換によって、ユタは悩みを解消するための具体的な方策をクライアントに提示することが可能になる。ここに示した事例に即して言えば、守護神と火の神を祭ること、ヌジファをすること、祖先の位牌を適正にすること(事例A)、土地を清める祓をすること(事例B)である。クライアントの当初の悩みが、それを解消するには何をすればよいかのわかりにくいものであればあるほど、ユタによって提示される解消のための具体的な方策はクライアントの心をとらえ、その方向へとクライアントの行動を駆りたてるものとなるのではないだろうか。これに対して臨床心理学的なカウンセリングではカウンセラーから明確な具体的な方策を提示することは少ない。むしろ、クライアントが連想を通じて意味づけの変換の作業を行い、それにまつわる感情や葛藤を取り扱っていく共同作業が、悩みを解消していく方策となる。このため、臨床心理学的なカウンセリングは定期的に面接を行う契約をして、ある程度の期間継続して行われる必要がある。ユタによるハンジ面接が1回ごとに終結し、継続面接の手続きをとらないのは、具体的な解消策が一方的に明確に提示されるからでもあると考えられる。

さて、ユタによって行われる悩みについての意味づけの変換は、クライアントにとって、悩みを解消するための具体的な方策が与えられるという効果を持つだけなのであろうか。土地と結びついた祖先供養の文脈に意味づけが変換されることには、それ独自の深い心理的な意味が存在するのではないだろうか。もしそのような意味が全くないとすれば、どのような方向にでも、意味づけを変換し解消策を提示できさえすれば、

それでカウンセリング機能は果たせることになる。しかし、大橋⁴⁾が膨大な歴史資料の研究から示しているように、ユタが歴史上さまざまな時点で弾圧を受けながらも、数百年にわたって存在しつづけ、今日なお多くの人々の心をつかみ、衰えることなく次の世代を再生産しつつあることから見ても、個人の悩みが土地や祖先の供養と結びついた文脈でハンジ(判断)されることの中には、文化を共有する人間同士の間でしかわかりにくい、しかしその文化の中にある人間の心を癒す力を持った独特の意味世界が存在しているように感じられる。その点については、本研究では明らかにすることは難しい。今後の研究の課題としておきたい。

まとめ

本論文では、筆者がクライアントとなって体験したユタによるハンジ面接場面を2例提示し、それを臨床心理学的な観点から検討し、ハンジ面接の特徴を考察した。特徴として抽出したことを簡単にまとめると、以下の4点をあげることができる。①クライアントに関連した事実をユタが超自然的な方法で「当てる」ことで、独特のラポールが形成される。②面接過程をリードするのは一貫してユタである。③クライアントの悩みは祖先供養・土地供養という文脈に移し替えて解釈される。つまり、悩みの意味づけの変換がなされる。④祖先供養・土地供養の文脈で、悩みへの対処策がユタから具体的に提示される。

以上にまとめた特徴は、筆者がクライアントとして体験したわずか2例のハンジ面接から取り出したものである。しかも先に述べたように、筆者は切迫した悩みを抱えてユタを訪ねたわけではなく、また沖縄文化を共有する人間でもないため、この2例が典型的なハンジ場面であるとは言にくい面を持っている。したがって、ここで取り出した特徴は、今後の研究を進めていくための仮説と考えておくべきであろう。また、個人の悩みの意味づけが祖先供養・土地供養という文脈に変換されて解釈されることには、固有の文化の中で、それ独自の心理的意味があるのではないかということも検討課題として残った。今後は地元の人がクライアントとして受けているハンジ面接の場面を観察する作業を通じて、これらの点について検討していく必要があると考えられる。

本研究は平成6年度文部省科学研究費助成(総合研究A, 課題番号06301014)を受けた。なお、調査には久留米大学の安達義弘, 入江康介が同行した。

文献

- 1) 池上良正：北のミコ・南のミコー民間巫者における「修行」を手がかりとして。弘前大学人文学部特定研究報告書「文化における『北』」, 55-87, 1989.
- 2) 池上良正：民俗宗教と救いー津軽・沖縄の民間巫者ー。淡交社, 1992.
- 3) 大橋英寿：沖縄における shaman<ユタ>の生態と機能ーハンジ場面観察による client の事例研究ー。東北大学文学部研究年報, 28 : 1-46, 1979.
- 4) 大橋英寿：沖縄シャーマニズムの歴史ーユタ禁圧の諸相と背景ー。東北大学文学部研究年報, 32 : 1-66, 1983.
- 5) 饒平名健爾：祭祀伝承者としてのシャーマン。人類科学, 26 : 61-84, 1973.